

自分の思いや考えを伝え合う力を育てる英語科学習指導 ーパフォーマンス評価に基づく表現活動の工夫を通してー

玖珠町立八幡中学校 平松 智美

はじめに

新学習指導要領外国語では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成する」(注1)ことが目標として設定され、育成を目指す資質・能力の一つとして、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりする力を養う」(注2)ことが挙げられている。

また、今回の改訂では、「話すこと」の領域が〔やり取り〕と〔発表〕に分けられ五つの領域別に目標が設定された。これは、「互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する観点から、「話すこと〔やり取り〕」の領域を設定するとともに、言語の使用場面や言語の働きを適切に取り上げ、語、文法事項などの言語材料を効果的に関連付けた言語活動とする」(注3)などの改善・充実を図るためである。

大分県英語教育改善推進プランでは、「知識・技能を活用して、論理的に考え、英語を用いて自分の考えや様々な情報を伝え合う力を高めることは、これからのグローバル社会を生きる大分県子どもたちが、大分や日本について、その魅力を主体的に世界に発信する」(注4)ことにつながるため、授業改善を進める取組として、小・中・高等学校の各学校段階での学習到達目標を明確にし言語活動の充実を図ること、教員の英語力・指導力の向上を図ることが明示されている。

玖珠郡外国語部会でも、「話す・書く」を中心とした表現活動の充実を目指す研究を進めている。実際のコミュニケーションにおいて必要な語彙力を高めるために、各学校で指導の工夫を行い、定着状況を町の確認テストで把握できるように取り組んでいるが、生徒の話すことの領域における語彙や表現が不十分であり、身に付けた語彙や表現を繰り返し活用したり、習得した知識や経験を生かし、場面や状況などに応じて適切に表現したりする機会が不十分であること等の意見が出されている。また、

玖珠町では2019年の中学校の統合を見越して、英語科で統一した教育課程、評価やテスト等の作成を行っているが、話すことの評価においては学校裁量に任せている部分が多いため、他の技能と同様に、統一して行えるようにすることが急務である。

以上のことから、「話すこと〔やり取り〕」の領域における目標を達成するための指導と評価の在り方を構築し、生徒の思いや考えを伝え合う力を育てる具体的な手立てを探っていくこととした。なお本研究では、生徒にどんな力を身に付けさせたいかを明確にした学習目標から、その成果を測る評価方法を設定し、単元のゴールから指導内容を構想していく逆向き設計で研究を進めていくこととした。

I 生徒の実態と研究の方向性

1 「話すこと〔やり取り〕」の実態

(1) 実態調査の方法と内容

「英語学習」「話すこと〔やり取り〕」について、生徒の実態や課題を明らかにするために、本校第2学年8名を対象に質問紙による意識調査とパフォーマンステストを実施した。意識調査は「英語学習」についての5項目、「話すこと〔やり取り〕」についての5項目で行った。パフォーマンステストでは、教師の提示する話題で、教師と1対1で行うスピーキングテスト、評価は5つの観点と3段階の判定とした。

(2) 調査結果と考察

意識調査では、「英語が好き」7人、「まあまあ好き」1人と全ての生徒が肯定的に回答した。しかし、聞くこと、読むこと、書くこと等、他の領域に比べると、「話すこと」に難しさを感じる生徒が6人と多い(資料1)。言いたい表現や単語を思い出したり、文を頭の中で組み立てるのに時間がかかったりすることや、学習した表現を使って話すことに慣れる場が十分でないこと、英語が伝わってうれしいと達成感を味わう経験が不十分であること等の原因が考えられる。生徒が英語でやり取りするために必要な表現や語彙を、授業の中で繰り返し

使えるようになるために、継続した活動を仕組んで、話す場を保障する必要がある。

資料1 「英語学習」に関する実態

あなたが英語が難しいと感じる時、それはどんな時ですか。

	あてはまる	まあまああてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
a 英語を聞き取るのが難しい。	3	1	4	0
b 英語を話すことが難しい。	1	5	2	0
c 英語の文を書くことが難しい。	1	2	5	0
d 英語の文を音読することが難しい。	0	3	5	0
e 単語を覚えるのが難しい。	2	0	5	1
f 英語の文を読んで理解することが難しい。	1	3	3	1

また、「話すこと」に関する項目では、英語で積極的に発言や会話ができない理由として、8人中7人が「自信がない」、6人が「間違えるのが嫌だ」と回答した。これは、生徒が学習した英語を正しく使うことに意識を向け過ぎていて、言いたいことが相手に伝わるか、上手く話せるか等、話す前から不安を感じている状況にあるからであると思われる。その改善のため、英語の使用場を増やすことで話す場に慣れさせ、不安感を減らすこと、その際、生徒の興味・関心のある話しやすい話題を設定し、話したいという意欲を引き出すことが必要であるとする。また、評価と指導においても、文法を重視し過ぎずに内容を伝えることが大切であると生徒自身が自覚できるような工夫をする必要があるとする。

パフォーマンステストでは、教師から質問をしないと会話が進まず、話の切り出し方やつなぎ方がわからない、自分が言いたい表現が英語で出てこない等の状況が多く生徒に見られた(資料2)。やり取りに必要なスキル(会話をつなぐ、聞き返す、相づちをうつ等)を身に付けさせること、既習事項も含め活用しながら定着させることが必要であるとする。

資料2 「話すこと[やり取り]」のパフォーマンステストにおける実際のやり取り(生徒が教師をドッジボールに誘う設定)

生徒A	教師
Hello. My name is ○○. Play dodgeball.	Who plays dodgeball?
Teacher	What school?
Yahata	Teachers in Yahata junior high school play dodgeball? And?
Yes	When?
Students ... at 9 o'clock At 10:30	

2 研究の方向性

(1) 研究課題

調査結果から、自分の思いや考えを伝え合う生徒を育成するため、次のようなことが必要であると考えた。

- ・付きたい力を明確にし、評価を意識した指導の工夫をすること。
- ・語彙や表現の習得と活用のための場の設定と表現活動の工夫をすること。

(2) 研究内容

以上2点の研究課題を解決するために、次のように研究を進めていくこととした。

① CAN-DO リストの作成

「話すこと[やり取り]」において、どの学年で、どのような力を付けさせたいのか、国際基準や新学習指導要領をもとに3年間を見通したCAN-DOリストを作成する。

② パフォーマンステストとルーブリックの作成

単元や授業の中で、「話すこと[やり取り]」においてどのような力を付けさせ、何に焦点を当て、どのような指導を行えばいいのかを明確にし、それに伴う評価を行うために、パフォーマンステストとルーブリックを作成する。

③ 表現活動の工夫

単元を通して、ゴールをイメージした授業の中で、帯活動と言語活動を系統的、継続的に行うようにする。また、生徒がやり取りに必要なスキルと場面や話題に沿った語彙や表現が使えるようになるために表現集を作成し、活用させる。

(3) 目指す研究成果

本研究を進めるにあたり、研究のゴールイメージとして、CAN-DOリストにより付きたい力を意識したパフォーマンステストとルーブリックを設定し、単元を通して、ゴールをイメージした授業の中で表現活動の工夫を行うことで、間違いを恐れずに習った表現を使って、自分の思いや考えをやり取りできる生徒を育成することを目指すこととした。

II 研究の実際

1 CAN-DO リストの作成

CAN-DOリストとは、各学校が学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標

を「CAN-DO リスト」の形で具体的に設定するものであり、作成の手引きでは、「生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、主に教員が生徒の指導と評価の改善に活用すること、4技能を総合的に育成し、外国語によるコミュニケーション能力、相手の文化的、社会的背景を踏まえた上で自らの考えを適切に伝える能力並びに思考力・判断力・表現力を養う指導につなげること、教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度・姿勢を生徒が身に付けること」(注5)が目的として挙げられている。

以上のことに留意し、CEFRやCEFR-Jを参考に、「話すこと[やり取り]」の領域における、3年間の学習到達目標と、各学年、各学期での学習到達目標を作成した(資料3)。また、これをもとに単元の中での1時間毎の目標を明確にし、教科書のどの題材を用いて、具体的などのような力を身に付けさせるかについても設定した。

資料3 「話すこと[やり取り]」におけるCAN-DO リスト

学習到達目標【話すこと[やり取り]】		
学年末の到達目標	到達目標	教科書
3年3学期	自分の住む町や生活に関する話題などについて、簡単な英語で、情報を伝えたり、賛成や反対などの意見交換をすることができる。	Project3
3年2学期	行きたい場所についてのスピーチを聞き、簡単な英語で、質問したり、意見を付け加えたりしながらやり取りすることができる。	Lesson5 Use-Speak
3年1学期	好きな事や週末にしたことなどについて、簡単な語句や文を使って、相手に詳しい説明を求めために質問しながら、会話を広げることができる。	Lesson3 - Use Speak
2年3学期	町で紹介したい場所や物について、相づちやつなぎ言葉、簡単な語句や文を使って班で話し合うことができる。	Project3
2年2学期	好きな国や行って見たい場所などについて、お互いに質疑応答しながら、相づちやつなぎ言葉などを使って会話を続けることができる。	Lesson5
2年1学期	自分や相手の予定について、未来を表す表現を使って、質問したり、答えたりしながら会話を続けることができる。	Lesson3
1年3学期	自分の得意なことについて、相手からの質問に対し、適切に回答したり、関連する質問をしたりしてやり取りできる。	Lesson7
1年2学期	友達の話や習い事などについて、基本的な語句や構文を用いてインタビューすることができる。	Lesson5
1年1学期	初対面の人にあいさつや簡単な自己紹介などのやり取りができる。	Lesson1

2 パフォーマンステストとルーブリックの作成

CAN-DO リストをもとに、付けたい力の評価を行うため、パフォーマンステストとルーブリックを設定した(資料4)。

パフォーマンステストは、単元で身に付けた表現を活用できるように、実際のコミュニケーション場面を設定し、教科書の題材とも関連させながら身近で話しやすい内容とした。

また形態に関しては、生徒同士の1対1の会話を、日頃の表現活動の場と同様にクラス全体の前で行うものとした。生徒同士としたのは、それぞれの役割が固定されているわけではなく、質問したり答えたりという相互のやり取りが期待でき、更に会話の始め方や終わり方、話題の転換等も生徒自身が考えながら行うことできることや、テストに対する過度な緊張や不安がなく会話を続

けることが期待できるためである。

評価に関しては、ルーブリックで測りたいスピーキング能力として、内容の伝達、流暢さ、やり取り(質問と応答)、態度の5観点、判定基準はA、B、Cの3段階とした。

資料4 パフォーマンステストとルーブリック

スピーキングテスト実施について

1. 話すこと(やり取り)スピーキング課題

Topic: My favorite country	
2. やり取り(例)	
予想される答え(生徒A)	予想される答え(生徒B)
What is your favorite country?	Well...I like China because I like Chinese food. The Great Wall of China is nice.
I see.	How about you?
I like Canada because Niagara Falls are beautiful.	That sounds nice.
What will you give your family for souvenir?	I can give my mother a China dress. I can give my sister Chinese tea leaves.
Your mother will look beautiful.	In China, we can see pandas. They are very cute.
I will give my sister Maple syrup. It tastes delicious.	What animal can we see in Canada?
I don't know about animals in Canada. But I know a famous singer. Justin Bieber is famous in the world.	Oh, Justin Bieber? I know his songs. By the way, what will you do in Canada?
I will see Niagara Falls and eat pancakes with Maple syrup. How about you?	It will taste delicious. I will eat Chinese food and drink Chinese tea.
That sounds nice.	

3. テスト範囲

New Crown 2 Lesson 5
(主な言語材料: 動詞(giveなど)+A+B, 動詞(lookなど)+A)

4. 実施方法

- ・ペアごとにクラス全員の前でやり取りする。ペアと順番は直前に教師がくして決める。
- ・時間制限はないが、不自然な間が空いた時は終わりとする。

5. ルーブリック

	内容の伝達	流暢さ	やり取り(質問)	やり取り(応答)	態度
A	多少の文法的なミスはあるが、習った表現を2~3文使って、相手に伝わる内容で話すことができる。	英語使用に少々誤りはあるが、適切な発音で、声量、話す速さも的確で内容の伝達もできている。	相手に2~3文質問することができる。	聞かれたことに対して、Yes/Noだけでなく理由や感想など自分なりの情報を2~3文加えて話すことができる。	アイコンタクトを取り、自分から会話を続けていこうとする積極性の見られる態度である。
B	習った表現を使え、自分の考えをおおむね説明し、最後まで話すことができる。	英語使用に誤りはあるが、内容の伝達において大きな問題はない。	相手に1文質問することができる。	聞かれたことに対して、Yes/Noの応答ができ、自分なりの情報を1文加えて話すことができる。	アイコンタクトがあり、相手への意図が見られる。
C	習った表現を使えず、自分の考えを説明することが難しい。	英語使用に多くの誤りがあり、聞き手に内容の伝達ができない。	相手に質問することができない。	聞かれたことに対して、Yes/Noでしか答えることができない。	アイコンタクトがほとんどなく、相手に伝えようとする意図が乏しい。

全体を通して

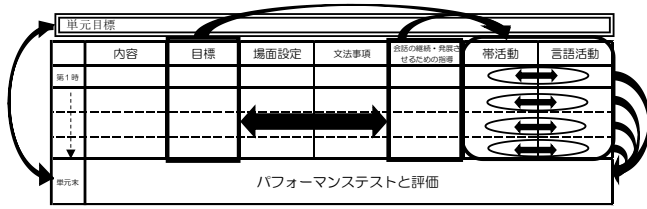
* 質問の繰り返しを2回以上求めた時はB、C評価

3 表現活動の工夫

「話すこと[やり取り]」において身に付けさせたい力を、単元を通して系統的、継続的に学べるようにするために、単元における指導の構想を立てた(資料5)。付けたい力をもとに、1時間毎の目標、やり取りに必要な力、帯活動、言語活動を考え、それらの全てが相互に関連付き、単元終末に行うパフォーマンステストにつながる。あわせて、1時間毎の目標とやり取りに必要な力の育成とに結び付きをもたせている。

帯活動と言語活動に関しては、身に付けた語彙や表現を繰り返し活用することで定着を図り、場面や状況に応じて適切に表現する言語活動を行うために、継続的・段階的に学習できるようにした。また、やり取りする内容においても、話題を合わせるようにし、内容を伝えることを重視させるために、話したいことを事前にメモする指導を行うこととした。

資料5 単元構想



あわせて、言語活動に必要な表現集を作成した。これは、やり取りするための基本的な表現と、単元を通して身に付けさせたい表現をまとめたものである。具体的には、帯活動やそれぞれの表現場面に応じた質問の方法や答え方、話題に沿った表現例に加え、つなぎ言葉や相づち、話題の転換等、やり取りに関わる表現を含んだものである。表現集を使用しながら、場面や状況に応じて適切に表現できるよう言語活動を工夫した(資料6)。

資料6 表現集の一部

Useful Expressions	
☆ Fillers (つなぎ言葉)	
Well	えーっと
Let me see.	えーっと
Let's see.	えーっと
☆ Responses (相づち)	
That's a good idea.	いい考えだね。
Wow!	わあ。
I think so too.	私もそう思う。
That's nice.	いいね。
Chat ① (Souvenir)	
What is a famous souvenir from Kusu?	玖珠の有名なお土産は何？
I think (Kaizoku karinto).	(海賊かりんとう)だと思う。
Do you like it?	それ好き？
What do you think?	どう思う？
How about you?	あなたはどう？
Why do you think so?	なぜそう思うの？
Because I like it.	それが好きだから。
It is delicious.	おいしい。
I gave my friends and they liked it.	友達にあげたら気に入ってくれた。
It's my favorite.	私のお気に入り。
Where can we get?	どこで買える？
Which do you like, (kitchomuzuke) or (karinto)?	(吉四六漬)と(かりんとう)。どっちが好き？
Anything else?	他に？
Can you show me the picture?	私に写真を見せてくれる？

III 検証授業の実際と考察

1 検証授業の概要と検証の視点

本校第2学年8名を対象に、Lesson 5の単元において、全6時間の授業を実施した。

前述した単元構想に基づき指導計画を立てた(資料7)。本単元は、オーストラリアの観光についてと、「ウルル」に対する現地の人々の思い等が題材として取り上げられている。旅の魅力や観光地に暮らす人々の考え等を学ぶことで、自分の好きな国を見つけ、旅行や留学、仕事で海外の国を訪れてみたいと感じさせるような活動を仕組むのに適しているとともに、自分たちの住む町の観光や文化についても考えるきっかけとなる題材である。

そのため帯活動では玖珠町について、言語活動では

世界の国々について、お土産や食べ物等、話題を同じものに設定し、そこでしたいことや感想等、自分の考えを互いにやり取りできるようにした。

検証の視点を、付けたい力を明確にした学習目標のもとに、単元を通してゴールをイメージした表現活動が、自分の思いや考えを伝え合うことができる生徒の育成に効果的であるかどうか設定した。

2 検証授業の実際

(1) 表現活動の指導の実際

単元を通して海外についての題材を扱っているのですが、どこで誰にどんなお土産が買えるのかを調べて紹介する等、生徒が言語活動を行う際は、言語を使う目的や場面、状況を明確にすることにより、より身近に自分のことを表現できるような必然性のあるものとした。また、言語活動全体を通して、iPad やパンフレット等を見せながら自分の調べたことをもとに会話をさせたので、相手の話している内容が具体的にイメージできたようであった。

会話をやり取りする際は、調べたことを話すことにつながげるために、単語が分からない場合はカタカナでもよいとし、自分の話したい内容のキーワードをメモに取らせるようにした(資料8)。英文を書き、それを見たり覚えたりして話すのではなく、自分の書いたメモをもとに会話をやり取りさせたことで、生徒は文法や語順を意識しすぎることなく、話したい内容を伝えることが大切であると意識できるようになってきた。また、同じ話題を違う相手と3回やり取りすることで、それぞれの相手から表現を学んだり、アドバイスをもらったりすることができた。回を重ねるごとにやり取りがスムーズになり、話す内容も増えた。自分の言いたい表現を尋ねて来る生徒が増えるなど、話すことに対しての意欲が向上した。

表現集の練習では、状況にあった表現を適切に使分けられるようになるために、繰り返し声に出して読むよう指導した。覚えようとしながら練習する生徒もいれば、読むことで精一杯の生徒もいた。

帯活動での話の切り出し方は、第3時まで教師が与えたが、第4時からは自分達で考えさせた。表現集を見たり、生徒同士で相談し合ったりする姿が見られた。

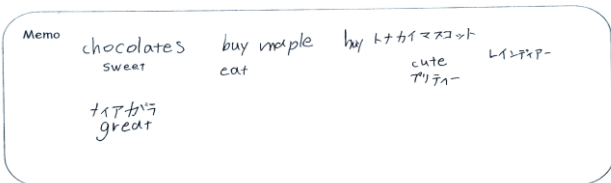
本文の内容を扱った第3時、第4時、第5時では、スライドを使って聞くことを中心に導入をし、その後、英語で内容に関しての質問をした。音声で十分に聞かせ、写真や絵を理解の補助として使用したため、ペアやグループで考える活動や答えの確認等では、意味内容を重視したやり取りをすることができていた。

資料7 単元指導計画

単元目標 自分の好きな国について、友達と会話をつなげたり、広げたりしながらやり取りすることができる。

	内容	目標	場面設定	文法事項	会話を継続・発展させるための指導	帯活動	言語活動
第1時	GET part 1 文法	友達に質問しながら会話を続けることができる。	世界の国のお土産やそこで買えるものなどを説明する。	give/show/buy/teach +人+物	質問する	珍珠のお土産について話す。	インターネットを見て、誰に、どんなお土産が買えるのか等を紹介し合う。
第2時	GET part 2 文法	聞かれたことに1文付け加えて友達と会話を続けることができる。	世界の名産や珍珠の美味しいものなどについて感想を言う。	look/sound/taste/smell/feel+形容詞	聞かれたこと+1文で答える。	珍珠の美味しいものについて話す。	インターネットを見て、世界の食べ物についての感想を言い合う。
第3時	本文 ①②	自分の意見を2文以上で説明しながら会話を続けることができる。	8月にオーストラリアに帰っていたエマが、健と話している。		自分の意見を2文以上で説明する+相手に質問する。	珍珠で観光客の方がどんなことができるか話し合う。	友達に、旅行に行くなら何をしたいかを2文以上で説明する。
第4時	Read ①	聞かれたことに2~3文付け加えて友達と会話を続けることができる。	健が読んでいたオーストラリアのガイドブックにウルルに関するコラムが載っている。		聞かれたこと+2~3文で答える	ガイドブックを参考に、珍珠の観光地について話し合う。	海外の観光地について紹介する。
第5時	Read ②	話題を変えながら友達と会話を続けることができる。			話題を変える	私たちが珍珠のためにできることについて話し合う。	アナング人について、旅行者が気をつけることについての意見を出し合う。
第6時	パフォーマンス	自分の好きな国について、友達と会話をつなげたり、広げたりしながらやり取りすることができる。	どの国が好きかを友達とやり取りした後、皆に紹介する。		習ったことを使って、会話をつなげたり広げたりする。	珍珠の魅力について友達と話し合う。	パフォーマンステストで好きな国についてのやり取りをする。

資料8 生徒のメモ



実際にやり取りする場面では、会話が詰まったりした時に、表現集を見ながら会話を続けることができたが、お互いの顔や目を見ながらのコミュニケーションが十分に行えなかった。そのため、第5時では、やり取りする場面で表現集を持たせずに活動させた。紙を見なくても不安にならないように、会話の流れや表現などをスライドで見えるようにしておいたので、困ったときにそれを見ながら会話を続けることができた生徒もいた。

(2) パフォーマンステストの実際

パフォーマンステストの実施にあたっては、時間制限を設けなかった。これは、検証授業での表現活動において設定した1分間のやり取りでは時間が足りず、自分のことを十分に話せない生徒がいたためである。

テストでの実際の会話は、どのペアも学習した語彙や表現(It looks.../souvenir 等)を使いテーマに沿った話題で会話を続けていた。あわせて、つなぎ言葉や相づち(Oh, I see./Well...等)を使い、会話が途切れないように意識していた。また、質問が思いつかない時には、

表現集に出てきた簡単な表現(How about you?/Why? 等)で相手に聞きたい内容を尋ねることができていた。更に、会話に詰まると、“by the way”を使って、自分達の話しやすい日常的な話題へと転換していったため発話量が増えた(資料9)。

事前に評価の基準とテストの方法等を示していたので、目標に向かったやり取りができていた。パフォーマンステスト後の自己採点の中で、生徒自身が、どこができて、どこができていなかった等、自分の学習を振り返ることができていた。

資料9 検証授業後のパフォーマンステストでの実際のやり取り

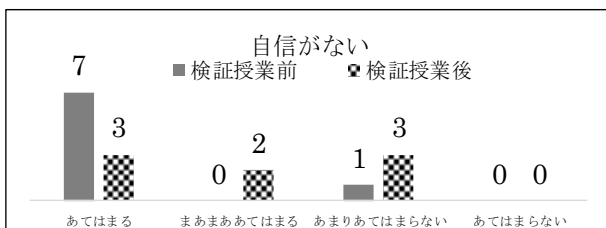
生徒B	生徒C
What country do you like?	I like Canada. Canada is famous for Niagara Falls.
I see.	It looks... it look nice.
Oh.	How about you?
I like Australia. I like falls. It's very... it's very beautiful.	Oh, I see. Australia's famous souvenir?
Well... I don't know.	Oh, I see. By the way, did you study English?
Yes, I did.	Oh.
By the way, did you watch TV?	Yes, I did. I watch news. How about you?
I watch "monitoring" yesterday.	Oh, I see. Is it interesting?
Yes.	
I don't know.	Oh, why?

3 考察

(1) 表現活動からの考察

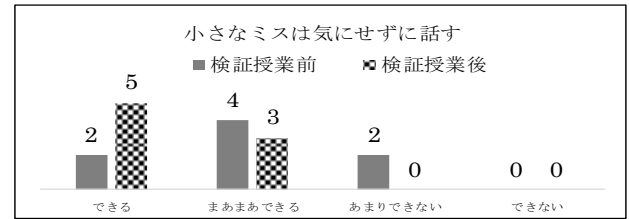
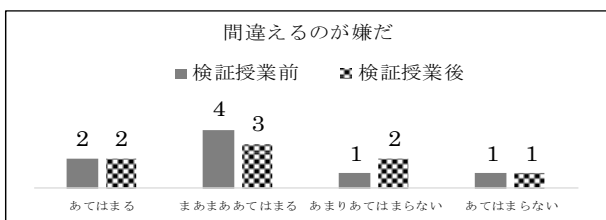
検証授業後の意識調査では、英語で積極的に発言や会話ができない理由で「自信がない」と答える生徒が減少した(資料 10)。具体的な場面を設定し、帯活動と言語活動を連動させて話す活動を多く仕組んだことが、話すことへの不安感を減らすことにつながったのではないかと考える。更に表現活動でも、玖珠町と世界の国々を結び付け、帯活動と言語活動で同じような話題を設定したため、話すことに慣れていったと思われる。また、表現集を使用したことで、場面や状況に合わせた意味のある文脈での表現の使い方が身に付いてきたことが、話しやすさにつながり、積極的に発言できるようになったのではないかと考える。

資料 10 検証授業前と後の意識調査をもとにした分析①



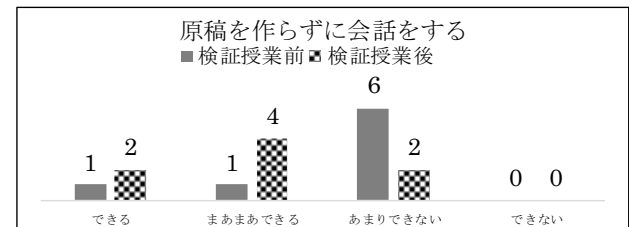
また、「間違えるのが嫌だ」と答える生徒は、わずかな減少だったが「小さなミスを気にせずに話す」と全員の生徒が答えている(資料 11)。これは、間違えることに対する不安がありつつも、実際に話す場面では内容を伝え合うために、まずは話してみようという前向きな気持ちで取り組むようになったためであると考え。授業において、文の作りや語彙の使い方等の正確さを意識して話すよりも、調べたことや知っていること等、自分が伝えたい内容を相手に話せるようになることを重視させながら授業や活動に取り組ませたことや、言いたい表現が分からなかったり、思いつかなかったりした生徒達が、表現集を利用することで会話のきっかけや話題のヒントを見つけられたことが有効だったのではないかと考える。

資料 11 検証授業前と後の意識調査をもとにした分析②



さらに、原稿を作らずに会話をすることができると思える生徒が増えた(資料 12)。話したい内容を英文として書いて準備するのではなく、キーワードをメモで取らせてから話す指導を行ったことで、書いた文を読んだり、覚えた文を話したりするのではなく、伝えたい内容を整理しながらやり取りできるようになったためであると考えられる。

資料 12 検証授業前と後の意識調査をもとにした分析③



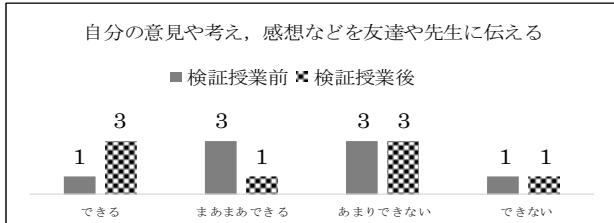
(2) パフォーマンステストからの考察

パフォーマンステストでは、生徒は基本表現やつなぎ言葉を毎時間繰り返し使っていたことで、不自然な沈黙が続くことなく、会話を続けることができた。

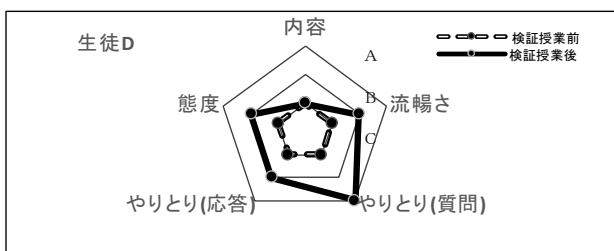
また、「自分の意見や考え、感想などを友達や先生に伝える」ことが「できる」と答えた生徒が、事前調査では8人中1人だったが、事後調査では3人に増えた(資料 13)。これは、表現活動をさせる際に、その単元での新出事項だけではなく、未習事項や既習事項を織り交ぜながら活用させたことが有効であったと考える。やり取りに必要な表現に加えて、小学校外国語活動で慣れ親しんだ“want to”や前単元で学習した“There + be 動詞”“I think～”等も、この単元でのやり取りに使える表現だったため、表現集に載せて練習させた。これまで学習してきた表現が定着するとともに、新たな単元で学習した表現を使うことで自分の思いや考えをより伝えることができるようになり、話したい内容を授業で十分に練習してきたことがテストでも生かされたと考え。一方で、「自分の意見や考え、感想などを友達や先生に伝える」ことに関して、「あまりできない」「できない」と答えた生徒に変化はなかった。しかしながら「できない」と答えた生徒の検証授業前後のパフォーマンスステ

トを比較すると、内容の伝達は不十分なところはあるが、やり取りや流暢さ、話すことへの態度が向上し、付けたい力に対する伸びがうかがえる(資料14)。

資料13 検証授業前と後の意識調査をもとにした分析④



資料14 パフォーマンステストの比較



IV 成果と課題

1 CAN-DO リストについて

「話すこと[やり取り]」における CAN-DO リストを作成し、1時間毎の目標を明確にし共有することで、生徒はその時間のやり取りに必要な表現やスキルを身に付け、それらを使って表現できるようになることを目指して活動することができた。あわせて、見通しをもちながら授業や活動に参加することができた。

教師にとっては、目標に到達できたかを測るためにどのような評価をすればよいのか、どのような言語活動を仕組みればよいかなどについて整理でき、3年間を見通した指導と評価の計画を立てることができた。

課題として、各学校での既存の「話すこと」の CAN-DO リストを「話すこと[発表]」とあわせて調整するとともに、「話すこと」以外の領域を含めて各技能をバランスよく身に付けさせるための年間指導計画を作成する必要がある。

2 パフォーマンステストとルーブリックについて

単元のゴールから、どのような表現活動が必要であるか構想することができた。身に付けさせたい表現を、つながりのある話題の中で繰り返し使わせることで生徒の発話量が増えた。

テスト自体においては、より現実に即した場面で、生徒の話しやすい形態や話題等を設定することで生徒のやり取りの流れがスムーズに進んだ

パフォーマンステストで、自分から話を切り出した、相手に聞きたいことを質問したりすることができた生徒は、「もっと話せるようになりたい」という意欲の向上を見せた。さらに事前にルーブリックとテスト内容、テストに向けての学習の仕方等を伝え、言いたい表現を主体的に学習し、やり取りする内容が広がるとともに、どのような内容で評価され、どのようなことが達成できれば良いかがわかり、テストを受けることへの不安が減少していると感じられた。実際の評価についても目標に応じた評価を設定することで、生徒自身が単元の中でどれだけの力が身に付いたのかを確認できた。また、複数の観点に対してそれぞれの基準を設定しているため、ある観点では低い評価を得たとしても、違う観点では高い評価を得ることができ、できるようになったことに対して「うれしい」「楽しい」と答える生徒が増えた(資料15)。

資料15 パフォーマンステストでの生徒の感想の変容

	検証授業前	検証授業後
生徒E	・問題の意味が全く分からなかった。	・相手に質問を多くすることができた。 ・文に少し間違いがあっても頑張ってつなげた。 ・前回よりもたくさん話せたのでうれしかった。 ・もっと英語が話せるようになりたい。(道案内など)
生徒F	・聞いて答えられたところはあったけど、基本的に何のことにいかなどが全く分かっていなくて、どう答えればよいかわからなかった。 ・状況も伝えるのが難しかった。	・最初よりはうまくしゃべれるようになったし、慣れたりすると楽しいし、冷静になったりすると意外と英語が分かったので楽しかったです。
生徒G	・パニックになり、文法はわかっていたけど、思うように言えなかった。	・間違ったところはあったが、前よりはしゃべることができた。 ・アイコンタクトをとって話すことができた。 ・つなぎ言葉をに入れて話すことができた。

課題としては、テスト形式やルーブリックを生徒の実態に合わせて見直し、修正することが挙げられる。また、採点基準の記述は、簡単で分かりやすい内容にし、生徒の力を適切に評価できるようにする必要がある。

3 表現活動の工夫について

1時間毎の授業の目標を明確にし、生徒が話したくなる場面や状況を多く仕組むとともに、話したい内容を伝え合うことが大切であると実感させたことが、生徒の話すことへの不安感を減らすことに効果があり、実生活

でも外国の人と英語でやり取りしようとする生徒が増えるなど、意欲の向上につながった(資料 16)。

資料 16 検証授業前と検証授業後の意識調査の比較

Q. 困っていそうな外国の人に英語で話しかけられた場合、あなたは どうしますか。

前	後	
		a. 英語のみで会話する。
4	6	b. 簡単な英語の短文と身振り手振りで返答する。
4	2	c. 何かに書いてもらい、自分も図や英語を書いて返答する。
		d. 日本語と身振り手振りで返答する。
		e. 身振り手振りのみで返答する。
		f. 周囲の人に助けを求める。
		g. 聞こえなかったふりをして、何も答えず立ち去る。

やり取りの話題に関しても、お土産や食べ物、観光地について等、生徒の興味があるものに設定したことが、生徒のまずは話してみようという態度や意欲につながっていった。更に、やり取りに必要な表現と、場面や話題に沿った表現の練習と活用を繰り返し行うことで生徒が会話の流れに応じて使いたい表現を選んで使えるようになってきた。

一方、表現集の文字に頼りすぎることが多かったので、今後は、必要な語彙や表現が自然に使えるようになるために、音声で十分に聞かせたり、趣味や部活動、家での過ごし方など、生徒にとってより身近な場面での表現活動を設定し、繰り返し活用させたりする時間を多く取る必要がある。そして、事前に練習したり、あらかじめ準備したものを読んだりすることなく、お互いの考えや気持ち等を、適切な表現を使って英語で伝え合うことができるようになるために、聞くこと、読むこと等複数の領域を統合した対話的な表現活動を継続して仕組む必要がある。

あわせて、自分の意見や考えを伝えることができなと感じている生徒のために、授業中や単元の終末、テスト終了後等において、目標に対しての達成状況や話す力の伸びなどを適切にフィードバックしたり、生徒が自分自身の英語力を振り返る機会を与えたりし、話すことに対する自信をより付けさせる必要がある。

V 還元計画

本研究の研究成果並びに成果物を英語科授業改善の一例として、玖珠郡外国語部会において共有し、修正を

するとともに、他学年や他の単元についても作成を進める。また校内研究会においても報告し普及に努めていく。

おわりに

外国語を話そうとする時に、会話に慣れていないため思うように話せない、単語や表現等の言いたいことがすぐに出てこないと感じることは、誰も経験したことがあるだろう。日々の授業を行う中で感じていた、「子ども達に、英語を発信する力を付けさせたい」「子ども達が自信をもって、英語で自分自身の思いや考えを伝え合えるようになって欲しい」という思いから、この研究に取り組んだ。

学習指導要領が改訂され、使える英語を教えるための授業改善が益々求められてくる。特に、話すことや書くことの評価を適切に行い、指導につなげていくことは英語力を総合的に身に付けさせるためには必須である。

本研究では、中学第 2 学年での「話すこと[やり取り]」でのパフォーマンステストを通じ、表現活動の工夫を探ってきた。その結果、CAN-DO リストに沿って 1 時間毎の目標を明確にし、単元のゴールにおいて必要な力を継続的に指導することで、生徒が発信する言葉が増えていき、自分の思いや考えを伝え合う力の育成につながっていると強く感じた。

今後は、本研究の成果をもとに、他の技能との関連を図りながら 4 技能を総合的に育成していく。生徒が英語を通じて、英語で自分のことを生き生きと話せるようになるため、更なる授業実践に取り組んでいきたい。

〈引用文献〉

- (注 1, 2, 3) 文部科学省 中学校学習指導要領解説外国語編 pp. 8-10 平成 29 年
 (注 4) 大分県教育委員会 大分県英語教育改革プラン p. 8 平成 28 年
 (注 5) 文部科学省初等中等教育局『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』p. 5 平成 25 年

〈参考文献〉

- 榎葉みつ子『英語で伝え合う力を鍛える！1 分間チャット&スピーチ・ミニディベート 28』明治図書 2008
 道面和枝『中 2 で楽しく会話が続く！「2 分間チャット」指導の基礎・基本』明治図書 2009
 本多敏幸『英語力がぐんぐん伸びる！コミュニケーション・タイム-13 の帯活動&ワークシート』明治図書 2009
 佐藤一嘉編著『ワーク&評価表ですぐに使える！英語授業を変えるパフォーマンス・テスト 中学 2 年』明治図書 2014
 望月昭彦・深澤真・印南洋・小泉利恵編著『英語 4 技能評価の理論と実践—CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』大修館書店 2015
 泉恵美子・門田修平編著『英語スピーキングハンドブック』大修館書店 2016
 上山晋平『英語教師のためのアクティブ・ラーニングガイドブック』明治図書 2016
 小泉利恵「ループリックを使ったスピーキングの評価」『英語教育』12 月号 pp. 34-35 大修館書店 2016
 西岡加名恵・ほか編著『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる一学ぶ力を育てる新たな授業とカリキュラム—』学事出版 2017
 根岸雅史『テストが導く英語教育改革「無責任なテスト」への処方箋』2017